

点照

酷暑の折、涼を感じさせるモミジの木陰に誘われ、通りがかりのご近所さんらが訪れる東京都練馬区大泉学園町の「もみじの庭」。オーナーの尾形久美子さんが自宅の庭に小道やベンチを設け、5月から地域に開放したオープンガーデンである。

約130坪とバスケットボールコートほどの庭を幾重にも覆うように配されたモミジや練馬区の保存樹木に指定されたカエデが立ち並ぶ。「知らない人が入ってくるのは」と心配する声もあったが、プライベート空間とは庭車で遮られている。野草を見に訪れる専門家との出会いなどもあり、新鮮な日々だという。

庭をどうするか考え始めたのは2年ほど前。税理士には小分けにして売却を勧められたが、まとまった緑を残したかったため練馬区に公園として引き取ってほしいと打診した。しかし回答は「お金がかかるので要らない」。代わりで紹介されたセミナーで、庭

東京の緑 シェアして守る

を開放して緑を残そうと訴える甲斐徹郎氏に共感した。

甲斐氏は環境デザインの一ムネット(東京・世田谷)代表取締役。庭木や生産緑地をどうするか悩む地主の相談に乗る。落ち葉や畑の土ほこりに近所の苦情は多い。やむを得ず木を切れば、離れて眺めてきた人から「あの木を切りなんて」となじられ、先祖

代々の緑を断った罪悪感にもさいなまれる。甲斐氏は「この不幸なわけを解かなければ緑は残せない」と話す。隣の緑を迷惑に感じるのは「今の住宅は閉じた空間で完結する快適さを追求するため」というのが甲斐氏の見方だ。隣の緑に触れ、閉じた生活では得られないせいたくを味わねば理解が広がるのではない。庭の開放はコミュニ

ニティーの利用で生まれる価値を体感してもらおう試みだ。

東京の緑の減少は下げ止まりつつあり、23区は公園の拡大やビルの緑化が進んで千代田、中央、渋谷、世田谷各区などは増加傾向にある。だが生産緑地が2022年に期限を迎えて宅地化が進めば逆戻りしかねない。今ある緑を残すのは喫緊の課題だ。

もみじの庭は甲斐氏が設計し「緑の環境プラン大賞」の国土交通大臣賞を受賞。工事費約250万円のうち100万円を賞金で賄った。尾形さんは蜂蜜を作りマルシェやバザーを開きたいと夢は膨らむ。緑の恵みを「近所とシェアすること」で緑を残す。コミュニティの価値を高め、地価の下支えにもつながる知恵だろ



緑を残すため、自宅の庭を地域に開放することにした尾形さん(東京都練馬区大泉学園町)